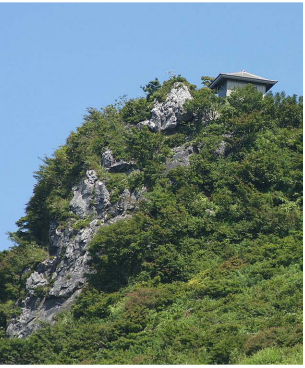
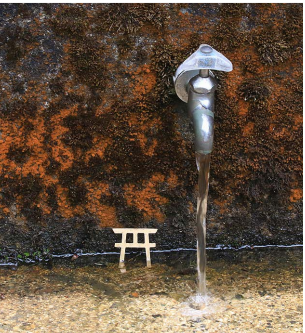




白洲正子と歩く琵琶湖

《江北編――山、命生む母性への祈り》

大沼芳幸 著

海青社

白洲正子と歩く琵琶湖

《江北編——山、命生む母性への祈り》

大沼芳幸 著

海青社

文化の時間を告げる灯

はじめに

随筆家白洲正子（1910～1998）は近江を深く愛し、紀行文を中心とする作品の多くに、近江をとりあげた。なぜ、彼女は近江に魅せられたのか？もはやそれは作品から読み解くしか術はないが、おそらく琵琶湖を中心とした近江の自然に宿る〝気配〟が彼女を惹きつけたのではないか、と思っている。自然の気配とは、〝自然に宿るカミ〟と言い換えた方が適切かもしれない。この自然信仰といっても良い彼女の感性は、近江の観音霊場も含まれる西国巡礼により開花したと自ら語っている。

白洲正子が、この自然信仰に目覚めたのは、1960年代前半、日本中が東京五輪の開催に沸きたち、文明の力が、日本人が失ってはならない文化すら押し潰しつつあった時代である。この時、彼女は作品を通して、自然という日本の古いカミと人との深い関わりから生まれた文化を見つめ直し、この文化を失うことに対する痛烈な警鐘を鳴らした。

そして現在、人は、日本は成長と挫折を経験すると同時に、自然の猛威にもさらされ、文明の放つ力の危うさに気付いたかに見えた。しかし、再び過去と同じ喧騒が日本を包もうとしている。このような時代に白洲正子の作品は当時以上に大きなメッセージを日本に問いかけているように感じる。そして、現代に不安を懐き、人として本来あるべき姿を求める多くの人たちが、彼女の作品に反応し、その舞台となった近江の地を訪れている。幸い、近江の地には、彼女が旅した時と変わらない文化の時間が流れている。

本書は、白洲正子の作品と、近江の自然や風土から〝安らぎ〟と〝気づき〟を求めようとする方々との橋渡しをすることを目的に、彼女の作品に関連する場所を取り上げ、筆者の感性を交え、ここに継承された文化について解説を加えた。

白洲正子 オンラインガイドマップ

江北編

❶～㉚ は本文中に出てくる社寺などの位置を示す。

白洲正子と歩く琵琶湖

《江北編 ― 山、命生む母性への祈り》

目

次

▼ 白洲正子オンラインガイドマップ上の各所の名称（1～30）

1 比良山打見岳（A4）	琵琶湖大津観光協会 ☎ 077-528-2772
2 邇々杵神社（B3） 3 旧秀隣寺庭園（B3） 4 池之沢庭園（A3）	びわ湖高島観光協会 ☎ 0740-33-7101
5 葛川明王院（B3）	堅田観光協会 ☎ 077-572-0425
6 馬見岡綿向神社（D6） 7 西明寺（D6） 8 熊野神社（D6）	日野観光協会 ☎ 0748-52-6577
9 政所若宮八幡神社（E5） 10 ろくろ工房 君杢（E5） 11 筒井千軒（D5） 12 蛭谷筒井八幡神社（E5） 13 大皇器地祖神社（E5） 14 湖東三山百済寺（D5）	東近江市観光協会 ☎ 0748-29-3920
15 湖東三山金剛輪寺（D5）	愛荘町秦荘観光協会 ☎ 0749-42-7683
16 大瀧神社（D4） 17 多賀大社（D4）	多賀観光協会 ☎ 0749-48-2361
18 伊吹山頂（E3） 19 三之宮神社（D3） 20 上平寺京極氏館（D3） 21 伊吹山文化資料館（D3） 22 居醒の清水（D3） 23 太平寺観音堂（D3）	米原市観光協会 ☎ 0749-58-2227 ・ 伊吹山文化資料館 ☎ 0749-58-0252
24 己高閣・世代閣（D2） 25 己高山（D2） 26 石道寺（D2） 27 向源寺（D2） 28 医王寺（D2） 29 安念寺（D2）	奥琵琶湖観光協会 ☎ 0749-82-5909
30 櫟野寺（D7）	甲賀市観光協会 ☎ 0748-60-2690
全体に関すること	びわこビジターズビューロー ☎ 077-511-1530

各所の公開状況など詳細は上記へお問い合わせください。

はじめに……1
白洲正子オンラインガイドマップ……2
序章　山、命生む母性への祈り……7
白洲正子と山……8
第一章　「比良」――琵琶湖を生み、そして見つめる山並み……15
一　比良の峰に宿るカミ……18
二　シコブチ明神……比良の恵みを運ぶ神……22
三　比良が溶け込む庭園……旧秀隣寺庭園……27
四　水が生まれ旅立つ……池の沢庭園……32
第二章　「鈴鹿の山」――賑わいを生む山並み……37
一　龍神を生み見護る山の視線……綿向山……42
二　蛇神 小野時兼の幻影……熊野神社……47
三　鈴鹿の巷……奥永源寺政所……49
四　木に暮らしをゆだねる民……木地師……52
五　流浪する貴公子……惟喬親王……55
六　山を駈ける者たち……蛭谷・君ヶ畑と氏子狩……57
七　神を創造した木地師の村……61
八　異国をも結ぶ鈴鹿の山並み……湖東三山……66

九　暮らしを結ぶ山の道・水の路……犬上川に沿って……70
十　鈴鹿の息吹が降り立つ処……多賀大社……74

第三章　「伊吹山」――荒ぶる、しかし優しき神の坐す山……77

一　日本武尊（やまとたけるのみこと）と伊吹の神……81
二　伊吹山護国寺と修験の山……83
三　伊吹山四カ寺……87
四　様々な伊吹の恵み……91
五　伊吹山の水……命を与え、そして宿す……97
六　水の女神……太平寺十一面観音……102

第四章　「己高山」――十一面観音が護る山……107

一　己高山（こだかやま）と鶏足寺（けいそくじ）……108
二　十一面観音……それは水を生み出す女神……112
三　木に宿るもの……十一面観音の造形……117
四　鶏足寺……水源の寺……122
五　石道寺十一面観音……観音様と見（まみ）える……130
六　向源寺十一面観音……白山比咩の幻影……134
七　医王寺十一面観音……山に帰った観音様……138
八　安念寺いも観音……戦火をくぐり抜けた観音様……143
九　櫟野寺（らくやじ）十一面観音……大地に根を下ろす観音……146
十　安住の地を得た観音様……湖北観音の里……151

水に宿る花

序章

山、命生む母性への祈り

『白洲正子と歩く琵琶湖《江南編・カミと仏が融けあう処》』では、白洲正子の足跡とその作品を通して、近江の文化の基調が、自然の中に宿る「カミ」と、仏教の神である「仏」との融合により形成されていることを確認した。そして、その作業の中で、比叡山を始めとする近江の山々が「カミと仏の融けあう舞台」として大きな役割を果たしていることに気づかされた。この《江北編》では、白洲正子の作品に登場する近江の「山々」、そして、山と山に拠る人が紡ぎ上げた様々な文化を取り上げる。

白洲正子と山

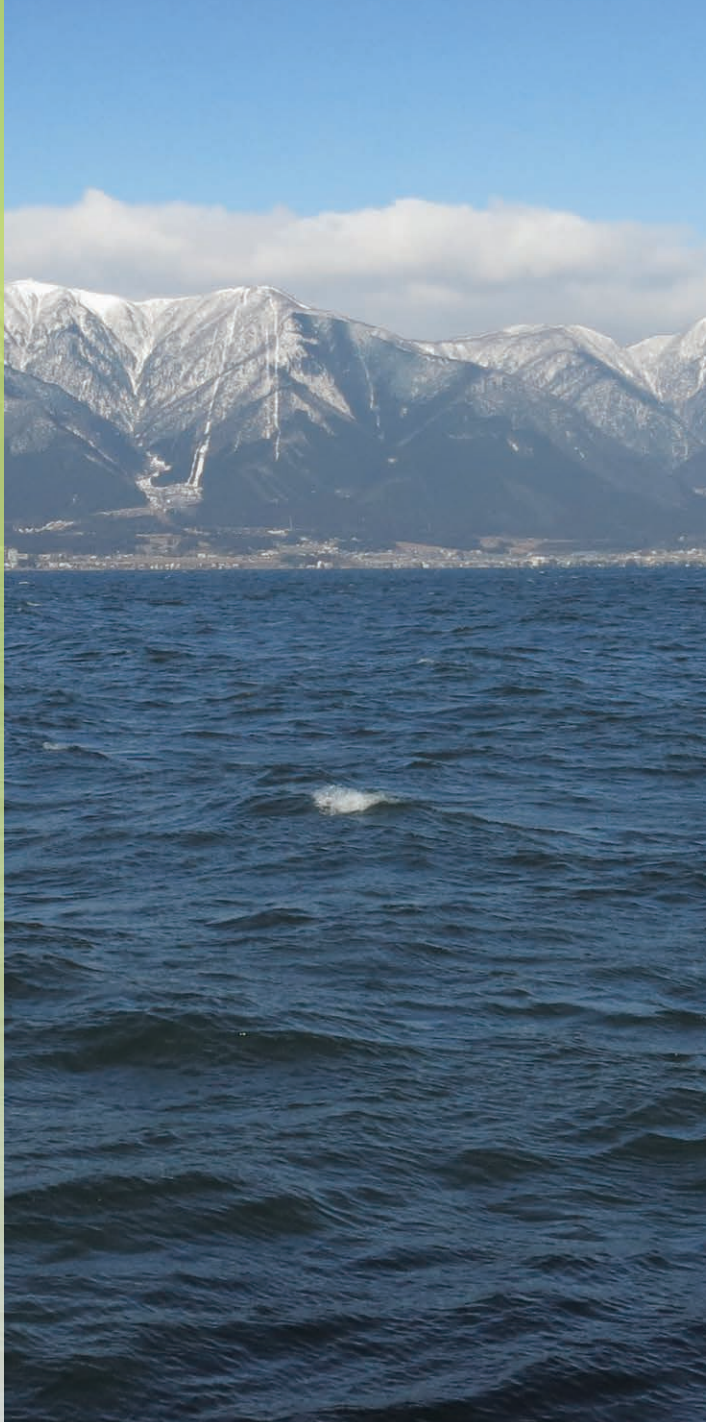
白洲正子は、山と、山に籠もる山岳信仰との関係を**山岳信仰について、私は殆ど無知にひとしいが、山に籠るということは、生みの苦しみを味わうことではなかったであろうか。或いは、生れる苦しみといってもいい。もともと色々なものを生む山には、母性神の性格があり、その中に入って、長い間籠る**

▲命の生まれるところ

このプレビューでは表示されない頁があります。

第一章

「比良」――琵琶湖を生み、そして見つめる山並み



琵琶湖の西岸、比叡山系に連なるように聳える山並みが、比良山系である。**堅田のあたりで比叡山が終り、その裾に重なるようにして、比良山が姿を現わすと、景色は一変する。比叡山を陽の山とすれば、これは陰の山と呼ぶべきであろう**〔近江山河抄：比良の暮雪〕。ここで、白洲正子が、「陰の山」と表現したのは、比良が「黄泉比良坂（よもつひらさか）」、すなわち、死者の世界に通じる山、と感じ取ったからである。琵琶湖に面した比良山系は、近江八景「比良の暮雪」に象徴される美しい山並みである。しかし、比良山系の裏にまわると景観は一変する。安曇川が刻んだ峡谷が延び、その段丘に張り付くように小さな集落が点在する。この峡谷を支配していたのが「シコブチ」という、不思議な名前を持つ神であった。《江南編：第二章・葛川明王院と回峰行》の項で紹介したように、シコブチ神は、回峰行の祖である比叡山の相応に比良の山並みを明け渡す。そして、相応は比良山中に懸かる三の瀧での行により、不動明王とい

▲琵琶湖と比良山系　琵琶湖を挟んだ対岸から望む比良山系。琵琶湖に接してそそり立つ、屏風のような山並みである。

う自然を象徴する神に生まれ変わる。死者の世界と、生まれ変わる世界は、表裏一体をなす。**相応和尚の後継者たちが、比良山へ籠るのは、平安時代以来、いや神代以来、そこに伝わって来た起死回生の思想による。……比良山について、私は陰気なことばかり記したが、大切なことは、この山が、新しい生命の泉であることだ**〔近江山河抄：比良の暮雪〕。

比良の名前を冠する神が「比良明神」である。この神は、《江南編：第二章・比叡山と最澄・石山寺》で紹介したように、近江の地主神として登場し、仏教の神に近江の地を明け渡す役割を演じる。これは、近江の神と、仏教の神との葛藤と、融合を示すと同時に、「比良の山並みが近江という国を生み出す聖地」として、意識されていたことを示しているように思える。

この章では、比良の山々に宿る古き神の姿を通して、命を生み出し、そして暮らしを支える山の魅力と力を紹介したい。

▲比良山系雲一筋　比良山系は曇っていることが多い。白洲正子が言う「陰」の山のイメージに近づきつつある情景。

▲竹生島を望む　比良山系は琵琶湖を見つめる。その視線の先には琵琶湖の護神である竹生島も見える。比良から生まれた水、そして命が琵琶湖に集っていることを実感する。

このプレビューでは表示されない頁があります。

第二章

「鈴鹿の山」――賑わいを生む山並み

近江は、琵琶湖を中心に四方を山に囲まれた国である。一章で触れた、西に聳える比良の山並は琵琶湖の水源であり同時に、**ここから先は丹波高原で、人も通らぬ別世界であった**〔近江山河抄：比良の暮雪〕と語られる、はるかに連なる異界との間にそそり立つ境界のイメージ。三章、四章で触れる北の山並みは、観念的な琵琶湖の水源、あるいは琵琶湖の護りとしてのイメージ。そして、この章で紹介する鈴鹿の山並みは、人・物・文化を結ぶ、交わりの山並みと表現してもよい。**鈴鹿連峰は、近江の南端から伊吹に至る八十数キロの間を、屏風のように取巻いている長大な山脈である。南は伊勢・伊賀、北は美濃に接しているので、険しいわりに峠道は縦横に通じ、伏木貞三氏の『近江の峠』（白川書院）によると、三十に余る古道が通っている**〔近江山河抄：鈴鹿の流れ星〕。

近江の湖東（琵琶湖の東岸）地域は、鈴鹿の山並みを介して伊勢とのつながりの強い地域であった。古

▲鈴鹿山脈　湖上から見た鈴鹿山脈。主峰の霊仙山を始めとする山々が琵琶湖に沿うように南北に連なる。鈴鹿の山から流れ出た水が、この琵琶湖に集うことを実感させる景色。そして、彼の山並みの向こうは、伊勢の国。

く倭媛（やまとひめ）は、近江を通り、鈴鹿を越え伊勢に至り、ここに祖神を祀り、この神に仕える斎王もまた、近江から鈴鹿を越え斎宮に赴いた。壬申の乱では、鈴鹿の山並みを挟み、大海皇子軍と近江朝廷軍が様々な駆け引きを行い、結果、鈴鹿の北端を突破し、近江に侵入した大海皇子軍により、近江大津宮は滅び去った。関ケ原の合戦もまた、近江に中心を置く勢力と、東国の勢力とが鈴鹿の麓で激突した。近江は近江商人を輩出した国であるが、その中でも、八日市を中心に活躍した保内商人（ほないしょうにん）と呼ばれる一群は、近江の産物と伊勢の産物を鈴鹿を越えて交換することにより財をなした。筆者とさほど歳の違わない方が、琵琶湖の魚料理が話題となった際に「わしら、伊勢もんより湖（うみ）の魚のほうが好きや」と普通に話していた。「伊勢もん」とは海の魚を指す。感覚的には海は日本海のほうが近いが、ごく近年まで、近江、特に湖東の人にとって海とは伊勢の海だったのである。

しかし、現在はどうだろう。伊勢は近江の隣にあり、地理的には近い国なのだが、とても遠い国のような気がする。江北からお伊勢参りを志すとすると、公

▲八風街道　東近江市杠葉尾（ゆずりお）の道標
東近江市八日市と伊勢を結ぶ八風街道は、道は険しいが、距離が短かったことから盛んに利用された。近江最後の集落が杠葉尾である。集落の外れには伊勢との関係の強さを感じさせる道標が残る。

▲八風街道　京の水　八風街道の峠にさしかかろうとする山裾から、清冽な水が湧き出ている。ここは、東国から京を目指す旅人にとっては、最大の難関を突破し、一息入れる場所でもある。「さあ、もう少しで琵琶湖が見える。喉を潤し、歩きだそう」。

このプレビューでは表示されない頁があります。

第三章

「伊吹山」――荒ぶる、しかし優しき神の坐す山

汽車が滋賀県に近づくと、一番先に現われるのがこの山で、ある時はきびしく、ある時は穏やかに、周囲を圧してそびえ立つ姿は、正に神山の風格をそなえている〔近江山河抄：伊吹の荒ぶる神〕。

伊吹山は標高１３７７ｍで、滋賀県の最高峰である。古代においては比叡山・比良山と共に「日本七高山」の一つに数えられ、現代では日本百名山の一峰としても知られている。

伊吹山は、東国と西国の接点に聳えている。**岐阜を過ぎてほどなく汽車は山の中に入る。やがて関ヶ原のあたりで、右手の方に伊吹山が姿を現わすと、私の胸はおどった。関西へ来た、という実感がわいたからである**〔近江山河抄：近江路〕。山頂からの眺望は抜群で、東はＪＲ名古屋駅を視認することができる。そして足下に、伊吹山と鈴鹿山脈を隔てる狭い谷を、新幹線、ＪＲ東海道線、名神高速道路、国道21号線が走っているのも見える。東西の勢力が激突した壬申の乱、姉川合戦、関ヶ原合戦の古戦場も伊

▲湖上からの伊吹山　琵琶湖の北東に聳える伊吹山は、琵琶湖の鬼門を護る山であり、琵琶湖の水源をなす山でもある。その姿は、琵琶湖の一円から仰ぐことができる。冬晴れの日、白く輝くその姿は神々しく、正にカミの坐す山であることが実感される。

吹の山麓であった。西に目を転じれば、琵琶湖が広がり、その向こうに比叡の秀峰も望める。比叡の裏は京都。まさに伊吹山が東西の狭間にたっていることを実感させる景観である。

伊吹山は、標高的には「低山」に分類されるが、本州の最も狭いところに位置し、回りを中部山脈を始めとする山地が囲んでいることから、夏は伊勢湾からの、冬は日本海からの季節風の通り道となり、山頂は一年を通じて霧に閉ざされ、一日を通して麓から山頂を望める日は、一年に60日ほどしかない。とりわけ冬の気候は厳しく、最深積雪（1年に降って消える積雪）11・8m、日最大降雪（1日に積もった雪の量）2・3mという、何れも世界山岳観測史上、最高の積雪を記録している。

伊吹山は、地質的にはほぼ全山が、約3億年前のサンゴに由来する石灰岩で構成され、天然の窪地であるドリーネ、石灰岩が柱状に林立するカレンフェルト地形や、巨巌の露頭がいたる所に見られる他、

▲伊吹山から琵琶湖を俯瞰　伊吹山は、御来光を仰ぐための夜間登山が盛んであった。夜、山頂から望むと、月光を浴びて琵琶湖と、近江の街並みが浮かび上がった。沖島の向こうに比叡山の灯火が見える。伊吹が生み出す水世界を比叡の山が見つめる。

▲伊吹山から麓を見おろす　伊吹山と横山丘陵との間を、北陸と東海を結ぶ「北国脇往還」が通っている。元亀元年（1570）6月、岐阜の織田信長は、江北の浅井長政と戦うため、ここを通り、画像右端で姉川合戦が勃発した。

このプレビューでは表示されない頁があります。

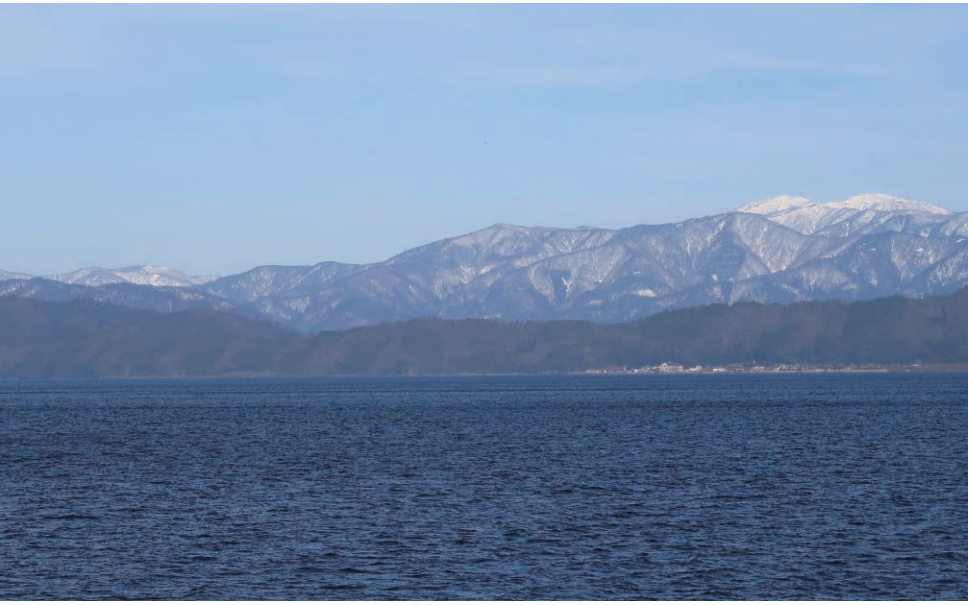
第四章

「己高山」――十一面観音が護る山

一　己高山（こだかみやま）と鶏足寺（けいそくじ）

己高山は、伊吹山と共に琵琶湖（近江）の鬼門、言い換えるならば、水の生まれる山として信仰されてきた。伊吹山からは姉川が生まれ、己高山の足下からは、湖北を広く涵養する高時川が生まれる。

この山は、当然のことながら聖地として意識され、山上の鶏足寺を中心に、多くの寺院群が建立された。己高山を巡る寺院群の歴史は古く、奈良時代にまで遡る。しかも、伝えられた仏像の技法は、奈良の官営工房の作に近く、当時としては、先進的な素材と技術によって生れた仏像が多く伝来している。しかし、寺の歴史を語る明確な文献資料はなく、応永14年（1407）に記された『己高山縁起』が最も古い。縁起では、〝己高山は近江の鬼門で、「古仙練行之秘窟」であった。行基菩薩が伽藍を草創し、泰澄和尚もこの聖地を崇めたが、荒廃してしまった。後に伝教大師最澄がこの地に至り修行し

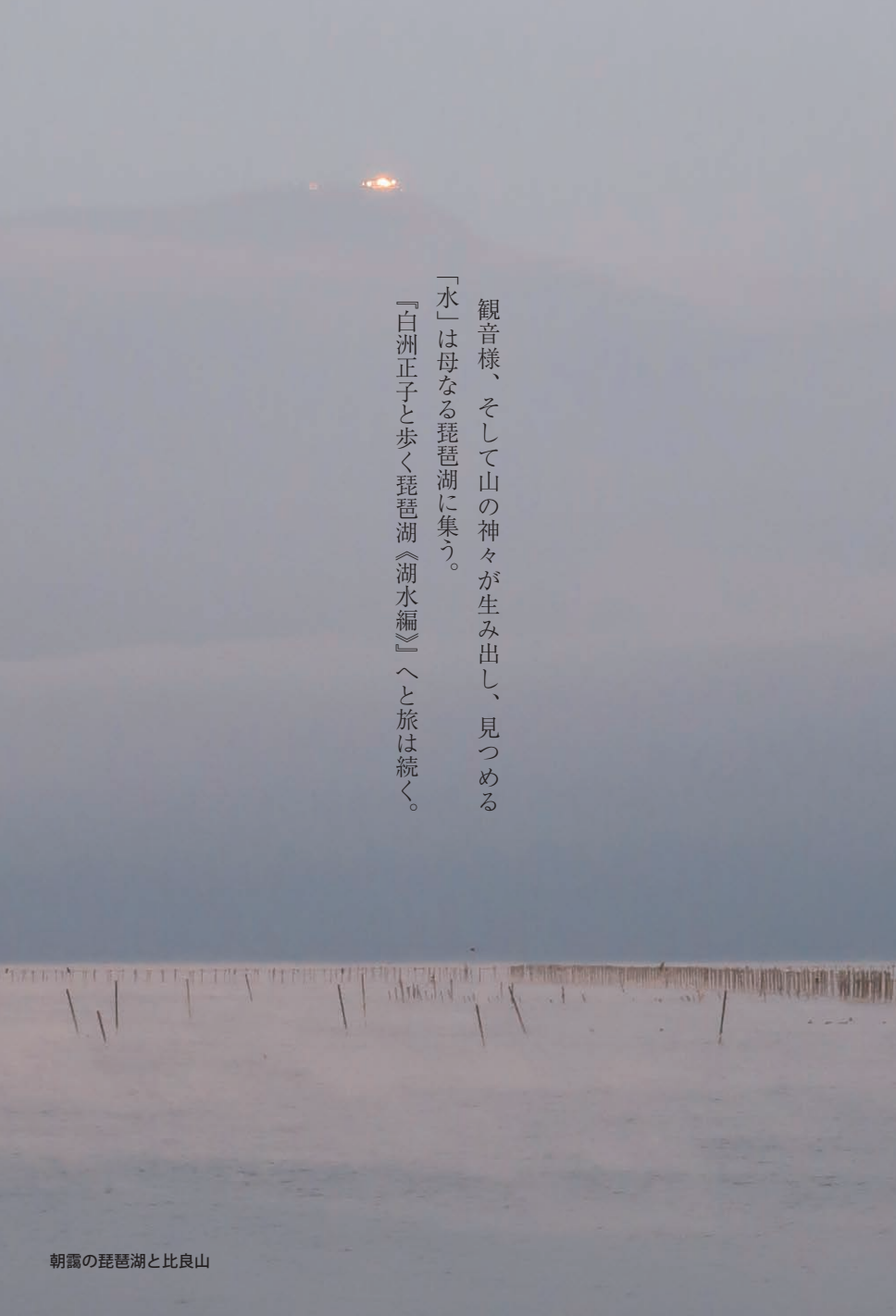


▲湖上から見た己高山　伊吹山を起点として、北に連なる山稜の一角に己高山がある。この山の元からは、前章で紹介した伊吹山が生み出した姉川と同様、江北の田畑を潤す高時川の流れが生まれる。頂からは琵琶湖、比叡山そして北には、白山の姿を遠望することができる。

た際、白山神が示現し、この霊窟を再興するよう求めた。最澄はこれに応え、霊木を御布木（みそぎ）として本尊十一面観音を造立した。あわせて己高山に関連する石道寺・向源寺の十一面観音も刻んだ〟。また、村の言い伝えでは〝昔、泰澄がこの山に至り、十一面観音を刻み安置した。しかし寺は廃れてしまった。後に最澄がこの地で修行を始めた。ある日最澄は、山中に霊威を感じ、雪の上についた鶏の足跡に導かれるように登ると、地が光り輝いていた。怪しんだ最澄がその光の元を掘ると、泰澄が刻んだ十一面観音の頭が出現した。最澄は感動し、自らその体を刻み出現した頭部と合わせて本尊とし、寺を再興した。鶏の足跡に導かれて十一面観音に至ったことから、この寺を「鶏足寺」という〟と、されている。**己高山は古くから信仰された神山で、渡岸寺（原文ママ）と同じく、泰澄大師が開き、伝教大師が再興したと伝える。湖北の古い寺は、どこでも同じような伝承を持っているが、それは近江に浸透していた白山信仰が、叡山**

▲己高山　己高山は拝する方向によりその姿を変える。己高山が生み出す高時川の流域から遥拝する姿は、典型的な神奈備型の山容を示す。人は、秀麗な山にカミを感じ、祈りを捧げ、山に宿るカミは祈りに感応して恵みをもたらす。

このプレビューでは表示されない頁があります。



観音様、そして山の神々が生み出し、見つめる
「水」は母なる琵琶湖に集う。
『白洲正子と歩く琵琶湖《湖水編》』へと旅は続く。

朝靄の琵琶湖と比良山

このプレビューでは表示されない頁があります。

著者紹介

大沼 芳幸（おおぬま よしゆき）

略　　歴

1954 年山形県新庄市生まれ。1982 年私立佛教大学博士後期課程中退。1983 年滋賀県教育委員会文化財専門職員採用、2011 年滋賀県立安土城考古博物館副館長を経て、2015 年より公益財団法人滋賀県文化財保護協会普及専門員。
2016 年 「琵琶湖八珍の取り組み」に対して博物館活動奨励賞受賞。

専門分野

琵琶湖をめぐる文化史を考古・歴史・美術・民俗・漁業・環境など幅広い視点から研究し、成果の普及活動を行っている。

主な著作

（単著）『白洲正子と歩く琵琶湖──江南編 カミと仏が融けあう処』海青社、2017
（単著）『琵琶湖八珍──湖魚の宴絶品メニュー』海青社、2017
（単著）『信長が見た近江── 信長公記を歩く』 サンライズ出版、2015
（共著）『おいしい琵琶湖八珍──文化としての湖魚食』 サンライズ出版、2015
（共著）「琵琶湖沿岸における水田開発と漁業──人為環境がもたらした豊かな共生世界──」 吉川弘文館「環境の日本史 2」、2013

ほか

In the Footsteps of Masako Shirasu
A Contemplative Guide to the Spiritual Power Spots of Lake Biwa
Volume Two: Northern Lake Biwa

by
OONUMA Yoshiyuki

しらすまさことあるくびわこ
白洲正子と歩く琵琶湖
江北編── 山、命生む母性への祈り

発 行 日 ──────── 2019 年 4 月 15 日　初版第 1 刷
定　　価 ──────── カバーに表示してあります
著　　者 ──────── 大　沼　芳　幸
発 行 者 ──────── 宮　内　　久

海青社
Kaiseisha Press
〒520-0112　大津市日吉台2丁目16-4
Tel. (077) 577-2677　Fax (077) 577-2688
http://www.kaiseisha-press.ne.jp
郵便振替　01090-1-17991

© OONUMA Yoshiyuki, 2019 ● ISBN978-4-86099-340-5 C0026 ● Printed in Japan
● 乱丁落丁はお取り替えいたします

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。